『鈴鹿本今昔物語集』巻27の研究

田　口　和　夫

Research on Volume 27 of "Suzukabon Konjaku Monogatari Shu"

Kazuo Taguchi

本論文は、田口和夫教授を中心とした自主ゼミである、説話ゼミ（旧今昔ゼミ）の活動の報告である。『鈴鹿本今昔物語集』の影印を読みながら、従来の諸説を確認しつつ、鈴鹿本の字形・墨色・虫損などから、新たな問題点を発見・考察し、また解釈においても従来の説をすすめたところがある。

This article is a report on the activity of the "Setsuwa" seminar in which Professor Taguchi is the leader. While reading the "Ei-in" of "Suzukabon Konjaku Monogatari Shu", we checked historic interpretations and recent discoveries and considered the new points through the form of the characters, the color of the ink, and parts destroyed by insects. Also we looked into the current opinions about interpretation.

はじめに

本稿は『言語と文化』第十六号～第二十号に連載した「巻29の研究」の補編である。文教大学説話ゼミでは巻27も一応読み通していたので、その成果から、問題となる部分を摘出してここに載せる。ただし、鈴鹿本修理の結果、それ以前の写真では読み取れなかった文字の有無についての諸説の相違は原則として今回は省略する。また、巻29において指摘していた、表題の話番号追記の問題は巻27においても認められるので、後に一項を設けて触れることとする。記述の手順は前稿と同じく、問題部分についての鈴鹿本の所在（丁と表裏）と問題箇所（═══を付す）を含む部分を挙げ、鈴鹿本と表記の形式を同じくする旧大系における所在を（　）の中に記す。次に〔考説〕として考えたことを記す。

三条東洞院鬼殿霊語第一

鈴鹿本巻27・1丁表　標題（480頁2行）

〔考説〕諸説「三条ノ東洞院ノ」と読むが、本文に「三条ヨリハ北、東ノ洞院ヨリハ東」とする通り、このままでは不十分な表記である。今昔の編者は、標題においてはおおまかに所在が判明すればよいとして、このように表記したと考えられる。第四標題の表記も同趣だが、これらは間に「ノ」を補読せず、「三条東洞院ノ」と小路名を列記したと見ればよいであろう。

川原院融左大臣霊宇陀院見給語第二

〔考説〕旧・新全集は各所に底本破損として東大十五冊本により補っているが、修理によって一丁裏最終行「大臣（ノ）」以外は判読できる。

桃園柱穴指出手招人語第三

鈴鹿本巻27・2丁表　標題（481頁12行）

〔考説〕「語第三」は「語第四」以下よりもしっか

り書かれているが、標題本体より、やや墨色が薄い印象がある。

鈴鹿本巻27・2丁表「桃園ト云ハ今ノ世尊寺也」（481頁14行）

〔考説〕「世尊寺と高明の桃園邸は別」との指摘が新大系にある。編者は混同していたのであろう。

冷泉院東洞院僧都殿霊語第四

鈴鹿本巻27・2丁裏　標題（482頁9行）

〔考説〕「冷泉院東洞院」は第一と同じく「ノ」を補読しないで読む。「語第四」は左流れ、しかも筆先が割れている。

鈴鹿本巻27・3丁表「否不射シト諍ヲシテ」（482頁17行）

〔考説〕「諍」は言葉争いの場合に用いられる。巻九第37話に「諍カフ」の用例あり、「アラガヒ」と読む。

冷泉院水精成人形被捕語第五

鈴鹿本巻27・3丁裏　標題（483頁11行）

〔考説〕「冷泉院」は諸注「陽成院」が正しいとする。ここは誤りと云うより「冷泉院小路ノ南」を略記したものと見る。「語第五」の「語」は墨色が薄い。

東三条銅精成人形被堀出語第六

鈴鹿本巻27・4丁裏「尚可（掘）掘キ也」（485頁6行）

〔考説〕上の「掘」字に止点が施される。この辺りから相当の速筆になっているので、不注意による衍字であろう。

鈴鹿本巻27・5丁表「物ノ（提）精ハ」（485頁10行）

〔考説〕「提精」部分、初め「提」と書き始め、「日」あたりまで書いてから誤りに気付き、上に

「精」字を書いてみたが、字体不明となり、右に「精」と訂正したもの。左右行に「人ニ成」が並んでいたための目移りによる誤写であろう。

在原業平中将女被噉鬼語第七

鈴鹿本巻27・4丁裏　標題（485頁13行）

〔考説〕「語第七」の「第」字筆先割れ。

鈴鹿本巻27・5丁表「片戸ハ倒レテナム」（486頁2行）

〔考説〕新大系「両開きの戸の片方」が正しい。唐招提寺の校倉も両開き戸。

鈴鹿本巻27・5丁表「畳一枚ヲ具シテ」（486頁3行）

〔考説〕牛車で移動していた、その車の畳と考えられる。

於内裏松原鬼成人形噉女語第八

鈴鹿本巻27・6丁表「女ヲ噉テケ（リ）ル也ケリトソ」（487頁3行）

〔考説〕初め「ケリ」と書き、まだ続くことに気付いて「リ」の上に「ル」を書いた。

参官朝庁弁為鬼被噉語第九

鈴鹿本巻27・7丁表「庁ニテハ朝庁（ニテハ）ヲ」（488頁4行）

〔考説〕旧・新全集は「ヲバ」とするが、新大系が「底本「ニテハ」を見せ消ちにして、「ヲ」と訂す」と云う通り、まず上の「東庁ニテハ」に引かれて「ニテハ」と書き、誤りに気付いて「ニテ」に見せ消ちを施して「ヲ」を傍記、「ヲハ」ではないとして、「ニテハ」全体を摺り消そうとしている。

仁寿殿台代御燈油取物来語第十

鈴鹿本巻27・7丁表「脇戸（ヲ）ノ許ニ」（488頁16行）

〔考説〕初め「ヲ」を書き、「ノ」と訂する。

或所膳部見善雄伴大納言霊語第十一

鈴鹿本巻27・7丁裏　標題（489頁11行）

〔考説〕「霊語第十一」の「霊語」の筆先割れ、「霊」から追記。

於朱雀院被取餌袋菓子語第十二

鈴鹿本巻27・8丁裏　標題（490頁9行）

〔考説〕「菓子語第十二」は墨色が薄い。追記。

鈴鹿本巻27・9丁表「眠タカリケレハ」（490頁16行）

〔考説〕初め「眠タリケレハ」と書き、後に別筆で「カ」を補入する。

鈴鹿本巻27・9丁表「手迷ヲシテ紐ヲ差テ」（491頁1行）

〔考説〕この「紐」を上着の胸紐とするのが旧・新全集、新大系、旧大系は餌袋・袴紐の二種を挙げ、前者とする。新潮は「文脈上、餌袋の組紐でなければならぬ」として、①鬼が解く、②頼信が結ぶ、③頼信は解いても結んでもいないと主張すると言うオコ話を原型とする。確かに、紐を封結にする、という前提からみても、この封がいつのまにか解けていたという展開が予想されるので、新潮の推定は納得できる。

近江国安義橋鬼噉人語第十三

鈴鹿本巻27・9丁裏「励マシケレ（ノ）ハ」（492頁2行）

〔考説〕「レ」に続けて「ノ」を書く。そして「ハ」を書く。あるいは「ハ」の一画が大き過ぎて「ノ」に見えるので、あらためて「ハ」を書いたか。

鈴鹿本巻27・9丁裏「此ク云ヒ立ニタ（リ）ル事ナレハ」（492頁5行）

〔考説〕初め「タリ」と言い切り、続くことに気付いて「ル」と訂正する。次丁の「云ヒ立ニタ（リ）ル事ナレハ」も同じ。

従東国上人値鬼語第十四

鈴鹿本巻27・12丁裏「河侍〃〃ト度々呼ケレハ・・下ニ候フト答ヘテ」（495頁15行）

〔考説〕「河」についての解が分かれる。旧大系・旧全集は流布本に従って「何」とし「いどこにはべる」と読む。新大系は「かははべる」と読み、「河はいるか」と呼びかけたと見る。新全集は「かはさぶらひ」と読み、新大系同様に「鬼の手下」とする。「下ニ候フ」は、旧大系・旧全集は、全体を言葉と見るが、新大系・新全集とも、「下ニ」は下からと地の文とし、「候フ」のみを言葉とする。新たに登場した「モノ」が「候」を用いているのは、追って来た鬼より下位の身分であることを示している。旧大系は、この「モノ」が主人公を助けると考えたが、ありえない。旧全集は鬼の言葉を「はべる」と読んだために、鬼とモノが対等に近いように解することになった。新大系も「はべる」と読んでいるが、ここで鬼が丁寧語を使う必然性はない。結局、やや落ち着かないが新全集に従って「かはさぶらひ」と読み、その実態は水怪と見るのが自然であろう。ただし、新全集で、鬼が「侍ル」を使うと注13で言っているのは旧注の残存で誤り。なお、河童の異称「かわらう」は日葡辞書に見えるが、それに似た「皮わらう」なる化け物の名が狂言（寛政有江本〈狐塚〉）に見える。「かはわらべ（河童）」→「河侍童」→「河侍」と変化した表記で、読みが「かはわらべ」であった可能性を想定しておきたい。

○本話の書写が途中で止まり、12丁裏に二行半、13丁表すべての白紙がある。次の第

十五話は13丁裏冒頭から書写が始まる。この本文欠落は原本においてなされていたものであろう。

産女行南‖山科値鬼逃語第十五

鈴鹿本巻27・14丁表「北‖山科ト云フ所ニ行ヌ」（496頁15行）

〔考説〕標題は「南山科」と言う。新全集は「標題と本文の執筆者は別人であった証」とする。標題策定者と本文制定者という意味では納得できる。ただし、鈴鹿本のこの箇所は標題と本文は一筆。原本文が「南山科」であったものを書写者が第七話「北山科・・旧キ山庄」に引かれて「北山科」としてしまった可能性はなくもない。

鈴鹿本巻27・15丁表「独リ‖マニハ不立入マシキ」（498頁2行）

〔考説〕本巻第38話に「独リ間」（ひとりぼっち）とある表記に従うべきか。ただし本話では、女は女の童を連れており、「独り」ではない。評語は説話の内容をきちんと反映しているとは言えない。

○本話の筆写者は、きちんとした書体で書いてはいるものの、相当不注意であったらしく、13丁裏2行「或」、3行「局」の書体、14丁表11行「物忌モシ入侍ス」の「入」の抹消、14丁裏3行「女書寝ヲシテ」の誤り、同8行「粟口」の「田」脱落など誤写が見える。

正親大夫□若時値鬼語第十六

鈴鹿本巻27・15丁裏「喬見テ居タ‖」（499頁4行）

〔考説〕諸注の言う通り「タリ」か「ヌ」のあるべき所である。行末という注意を要するところなので、「リ」の脱落は考えにくい。「ヌ」の誤写と考える。

東人宿川原院被取妻語第十七

鈴鹿本巻27・17丁表「□トシテ棹ノ有ケルニ打懸テ」（500頁17行）

〔考説〕新全集「ナエナエ」「ナヨナヨ」などを想定、新潮は「くたくた」も。巻19第18話に「練絹ノ様に乱〃ト」あり、ここは「クタクタ」でよいか。

鬼現板来人家殺人語第十八

鈴鹿本巻27・18丁表「真平ニ□殺シテ」（502頁2行）

〔考説〕後の4行「□殺シテケルニ」と併せ、諸注「ヒシギ」を想定する通りであろう。巻29第38話にも「ヒシゲ」相当の空格がある。

鬼現油瓶形殺人語第十九

〔考説〕新潮は本説話について、三輪神話を引いて、「油瓶ノ一怪異譚の遠い背後に、神婚の原風景が幽かに透けている」と評す。面白い。

近江国生霊来京殺人語第二十

鈴鹿本巻27・19丁表「忽ギ給ラム（ム）」（503頁6行）

〔考説〕「ム」に止点がある。

鈴鹿本巻27・19丁裏「門ノ内ニ入ヌルトモ」（504頁10行）

〔考説〕「門」字、初め「開」と書き、内画を摺り消している。

鈴鹿本巻27・20丁表「トナム諸語リ伝ヘタルト也」（505頁6行）

〔考説〕「諸」について新全集は「結語にこの語があるのは異例」と注する。ここは「語」と書くべきところを「諸」と書き、そのまま訂正し忘れたのではないか。

○この後、二行と半丁の空白があり、第21話が記される筈であったが、欠話。

美濃国紀遠助値女霊遂死語第廿二

鈴鹿本巻27・21丁表「今昔」（505頁10行）

〔考説〕「今」字、中を「尓」に近く書く。

鈴鹿本巻27・21丁表「段ノ橋」（505頁17行）

〔考説〕難読の文字だが、新大系が「現、岐阜市旦島付近を流れていた旦川（伊自良川と旧長良川が合流するあたりの称）にかかっていた橋か」と考証するのに従う。とすれば、新大系の読み「きだのはし」ではなく、「だんのはし」で良いであろう。

鈴鹿本巻27・22丁表「虚疑ヒサムハ」（507頁3行）

〔考説〕旧大系が「セ」と「サ」の古体の類似による誤写とする。旧・新全集も賛同。

○この第22紙裏に行書体で書き入れがあり、「此一条ハ尤以コワキ事也可有覚悟／／／」とあることが知られる。『鈴鹿本今昔物語集』考証編483頁に写真がある。「以＝もって」には単なる強意の用法があるので、意味としては通じるが、この文字は「以」の崩しと見るより、「外」の崩しと見る方が素直である。ここでは「以外（もってのほか）」と書くつもりが「尤外」と書いてしまったと考えたい。これは他総六丸落書とは違って紙背に書かれ、筆写者の点検者に対する落書と考えられていたものである。その事は変わらないが、「コハシ・コワシ」の語史を確認すれば、筆写時期がある程度確定できるか。日本国語大辞典は日蓮遺文に「こわし」が見えることを教えている。なお、41丁裏有名な総六丸落書に「尤以」がある。

猟師母成鬼擬噉子語第廿三

○新潮は昔話「鍛冶屋の婆」のうち「弥三郎婆の型が近い」とする。

播磨国鬼来人家被射語第廿四

人妻死後会旧夫語第廿五

鈴鹿本巻27・24丁裏「聊乃事ヲモ」（510頁12行）

〔考説〕「ノ」字、「乃」を書く。25丁裏10行「男乃去テ」も同じ。普通の「ノ」と混在するのは、原典の表記に引かれたものか。なお第28話参照。

鈴鹿本巻27・26丁表「尚尋テ可行キ也」（512頁8行）

〔考説〕「尋テ」は新潮・新大系は確かめる・調べる意とする。「訪て」ではないので、それは納得できる。「行」は旧・新大系は「おこなふ」、旧・新全集、新潮は「ゆく」。ここは「調べてから行く」でよいであろう。

女見死夫来語第廿六

鈴鹿本巻27・26丁裏「紐ヲソ解テ有ケル」（513頁8行）

〔考説〕新大系は「冥界での苦痛をやわらげるために、装束をくつろげる」と解するが賛成できない。新潮が詳しく述べるように、女の思いによって男の下紐が解けていると解すべきであろう。

河内禅師牛為霊被借語第廿七

鈴鹿本巻27・27丁表「河内禅師ト云フシ者ノ」（514頁1行）

〔考説〕宇治拾遺物語118の同文的同話に「河内前司」とある。その冒頭には「かはちのぜんじ」と仮名書きにする。このような形から「禅師」ができあがったのであろう。

鈴鹿本巻27・27丁裏「人ニ人ニ語テ」（514頁15行）

〔考説〕諸注の言う通り、行移りのための衍字であろう。

鈴鹿本巻27・27丁裏「大事シタ（リ）ル気ニテソ」

（514頁17行）

〔考説〕初め「シタリ」と書き、「リ」の上に「ル」と記す。

白井君銀提入井被取語第廿八

鈴鹿本巻27・28丁表「半物乃‖此乃‖銀乃‖提ヲ」（515頁12行）

〔考説〕ここにある「ノ」はすべて「乃」。ここにまとまってあるのは、原典表記に引かれたからと考えるのが適当だろう。なお「乃」は第29話の2「二歳許乃」、第33話「京極乃」がある。

於京極殿有詠古歌音語第廿九

鈴鹿本巻27・28丁裏　標題（516頁5行）

〔考説〕第21欠話以後通し番号で書かれて来た最後がこの「廿九」話である。「語」字は崩されているが、標題本文と一筆と見られる。本文9行目半ば、「御簾ノ内ヨリ」から筆跡変わる。

雅通中将家在同形乳母二人語第廿九

鈴鹿本巻27・29丁表　標題（517頁5行）

〔考説〕「第廿九」が重出する。前話後半の筆写者と本話の筆写は同一人と判断される。標題は崩された「語」の下左へ流れる。微妙だが、追記と見られる。筆写者が交代したため、話番号の重複に気付かなかったものであろう。

鈴鹿本巻27・29丁表「舟‖波中将トナム」（517頁7行）

〔考説〕巻29第23話の考説（『言語と文化』第18号）に記したように、この筆写者は「丹」を「舟」と書く癖がある。

鈴鹿本巻27・29丁裏「大刀ヲヒラメカシテ走（テ‖リ懸ラセ」（518頁1行）

〔考説〕初め「テ」と書き、右に「リ」と傍書した

が、「テ」を抹消し忘れたもの。

幼児為護枕上蒔米付血語第三十

鈴鹿本巻27・30丁表「散ト散□□□失ニケリ」（518頁13行）

〔考説〕諸注「散テ」の後に空白を置く。修復後は「テ」は不明。虫損ではない空白が三字分程度ある。例えば「掻い消つ様に」とでもあるべきところだが、原因不明。

鈴鹿本巻27・30丁表「可為□事□ト□」（518頁16行）

〔考説〕諸注、底本破損のため他本により補うが、修復後一部分が見える。

三善清行宰相家渡語第卅一

鈴鹿本巻27・31丁裏「寄来テ（踊）跪キ居タリ」（520頁10行）

〔考説〕初め「踊」字を書き、左に止点を付して「跪」を書く。

鈴鹿本巻27・31丁裏「押居テ領爪ル」（520頁14行）

〔考説〕「ス」字「爪」を用いる。珍しい。原典表記に引かれているか。

民部大夫頼清家女子語第卅二

鈴鹿本巻27・33丁表「参リ不給サリツルソ不給ツル」（522頁9行）

〔考説〕終わりの「ツル」の後に文字なし。このままでは諸注の云うように衍字ということになろうが、仮名部分の相違が気になる。「不興なりつる」とでもあれば意味があるが。

西京人見応天門上光物語第卅三

被呼姓名射顕野猪語第卅四

鈴鹿本巻27・34丁裏「ノ郡ニ（郡）」（524頁11行）

〔考説〕「郡」を重複して書き、止点を付す。

鈴鹿本巻27・34丁裏「火ヲ手ニ（成）取テ」（524頁15行）

〔考説〕「成」に止点、「取」を傍書。上に「女手ニ成シテ」があるので、引かれて誤る。

○本話は音を頼りに射ているが、全体としては照射猟の手順を知ることができる。

有光来死人傍野猪被殺語第卅五

鈴鹿本巻27・35丁裏「此レ（ヲ）ハ若シ」（526頁6行）

〔考説〕初め「此レヲ」と書き、右に「ハ」と訂正。

鈴鹿本巻27・36丁表「目ヲ不見開ネハ」（526頁11行）

〔考説〕初め「不開」と書き、補入符を付けて右に「見」を書く。

於播磨国印南野殺野猪語第卅六

鈴鹿本巻27・36丁裏「糸軽ヒヤカニテ（ン）」（527頁9行）

〔考説〕「、」は踊字と見られるが、誤り。あるいは「シテ」と書くつもりで「テ」を書いてしまい、「シ」を書き始めて止めたものか。

鈴鹿本巻27・37丁表「肱身ナト（ノ）ニ」（528頁6行）

〔考説〕初め「ナトノ」と書き、右に「ニ」と訂正。

鈴鹿本巻27・37丁裏「走リ逃（テ）ル事」（528頁12行）

〔考説〕初め「テ」を書き、右に「ル」と訂正。

鈴鹿本巻27・38丁表「野中ナムトニハ」（529頁2行）

〔考説〕初め「ナムニハ」と書き、補入符を付けて「ト」を書く。

狐大椙木被射殺語第卅七

狐変女形値播磨安高語第卅八

鈴鹿本巻27・39丁表「右近ノ将覧」（530頁14行）

〔考説〕「将覧」は「将監」の誤り。

鈴鹿本巻27・39丁裏「人ノ呼ヘハ行クヤト」（531頁5行）

〔考説〕諸注の言う通り、原形は「行ク也」であったろう。それを「ヤ」と読んで書いたもの。文章末の「伝ヘタルト也」が「ヤ」の形で書かれるのと同じ事であろう。

狐変人妻形来家語第卅九

鈴鹿本巻27・41丁表「思量モ无カリケ（リ）ル男」（533頁1行）

〔考説〕初め「ケリ」と書き、「ル」と訂正。

狐託人被取玉乞返報恩語第四十

高陽川狐変女乗馬尻語第卌一

鈴鹿本巻27・43丁裏「明日ノ夜ヲ具スシテ只一人」（535頁17行）

〔考説〕旧大系以外の諸注「夜ヲ」の後に脱字を想定する。新大系はそこに脱字を想定し、またその後に脱字「従者モ不」を想定する。「夜ヲ」で行が変わる点からすれば、それぞれに脱字を想定する新大系の考えには同意できる。「夜ヲ」の後はほとんど一行分の脱文「（明日ノ夜ヲ）待って多くの従者どもを連れて出発する。土御門の門まで来た時に、滝口は従者共にここで待てと言い置いて、一人の従者も」という内容が推定される。

鈴鹿本巻27・44丁表「出来ニ（タ）ケリ」（536頁10行）

〔考説〕初め「タ」を書き、抹消符を付けて「ケ」を書く。

鈴鹿本巻27・44丁裏「火燃テ値タリツル（ヲ）モ」

（537頁4行）

〔考説〕初め「ヲ」を書き、上に「モ」と訂正。

○新潮が注するように、本話は昔話「叺狐」と同型である。

左京属邦利延値迷神語第卌二

鈴鹿本巻27・46丁裏「為ルニヤ有ラム」（539頁8行）

〔考説〕「ラ」字「テ」にも見えるが、他の「テ」の字体とは違う。

頼光郎等平季武値産女語第卌三

鈴鹿本巻27・46丁裏「然許云立ニケレ（リ）ハ」（540頁2行）

〔考説〕初め「リ」を書き、上に「ハ」を書く。

鈴鹿本巻27・47丁表「従者モ何テカ可知キト」（540頁5行）

〔考説〕諸注「従者モ」の後に、ほとんど同意の脱文を想定する。空格なしの脱文が起こったことと、前行の終わり「遅シト励マシケレハ」が崩れた字体になることは関係があろう。即ち注意力が散漫になり、気を取り直して書き続けたとたんに脱文を起こしたと思われる。この後、二行置いて「渡ラム定」と書いてしまい、無理に「一」を補入すること、次の47丁裏の脱字も同じ不注意の産物であろう。

鈴鹿本巻27・47丁裏「尻ニ走返ヌ」（541頁1行）

〔考説〕初め「尻返ヌ」と書いてしまい、補入符を付けて「ニ走」を書く。

鈴鹿本巻27・47丁裏「渡（ニ・テ）テ行テ」（541頁2行）

〔考説〕初め直前の「渡ニ行テ」に引かれて「渡ニ行」と書いてしまい、間違いに気付いて「ニ」を「テ」と直してみたが、なお右に「テ」を書いたもの。

通鈴鹿山三人入宿不知堂語第卌四

鈴鹿本巻27・48丁表「鬼有トテ・・・然許ノ道中ナル」（541頁14・15行）

〔考説〕「有テ」と書いて「ト」を後補。「許ノ中」に補入符を付して「道」を書く。

鈴鹿本巻27・48丁裏「此ノ被負ル男」（542頁12行）

〔考説〕「此ノ負ル」と書き、補入符を付けて「被」を書く。

鈴鹿本巻27・49丁表「魂モ不劣ヌカト三人」（543頁4行）

〔考説〕諸説「カト」の後に「覚ユ」などの脱字を想定する。

鈴鹿本巻27・49丁表「天井（ヨリ）ニテ」（543頁6行）

〔考説〕初め「天井ヨリ」と書き、ミセケチして「ニテ」を書く。

鈴鹿本巻27・49丁表「云伝ヘタ（ル）リケルニヤ」（543頁7行）

〔考説〕初め「タル」と書き、右に「リ」を書く。

近衛舎人於常陸国山中詠歌死語第卌五

鈴鹿本巻27・49丁裏「誰カ云ツル（ソ）トモ不聞」（544頁1行）

〔考説〕新全集のみ注記するが、「ソ」には止点が施してあるので、「云ツルトモ」になる。これは行頭の「誰カ云ツルソト」に引かれて誤ったもの。

鈴鹿本巻27・50丁表「夜乃宿ニシテ寝死ニ」（544頁3・4行）

〔考説〕「乃」を用いる。「寝死」に振り仮名がある。

標題の追記について

『言語と文化』第18号において標題追記の問題を取りあげ、「まず目録の筆写が行われ、次いで本文

の筆写者が話番号のない標題と本文を筆写する。次いで目録の筆写者が話番号を追記する」という手順を想定した。巻27は目録を失っているので、本文標題との比較はできないが、話番号を後に追記する傾向は本巻にも認められる。ただし、巻29ほど単純ではなく、追記を原則としながら、話番号まで一筆で書いてしまう例が現れることに留意したい。

話番号の追記は、基本的には、標題本体の文字が楷書できちんと書かれているのに対し、「語第○」の「語」部分が崩され、全体にやや速筆になる特徴がある。巻27において、「語」が崩される段は1・2・3。4・6・7・9・11・17・18・23・24・26・28・29・29・31・32・33・34・35・37・38・39・40・41・42・43・44話である。「語」が崩されていても標題本体と印象が変わらぬ1・2・18・23・29の1・38・39話は標題本体と同時の写なのかもしれない。その他は標題本体から見ておおむね左に流れる方向で書かれている。24・26・41・43話は右流れ。またそれらは標題本体と墨色を異にする場合がほとんどで、追記の証と考えてよいであろう。

「語」が崩されていない話は5・8・10・12・13・14・15・16・19・20・22・25・27・30・36・45話である。そのうち、5・8・12・13・14・25・36話は標題本体から見て左に流れる方向で書かれる。これも追記なのであろう。

結局、「語第○」は追記と一筆の場合が混在していることになる。一筆のものがあるということは、原典に話番号が書かれていた事を示唆していよう。あるいは、書写の原則としては話番号追記であったが、書写者の筆が走って、話番号まで書写してしまった場合があるということなのであろうか。その理由が考えられる部分としては、第15・16話の話番号が標題と一筆であるのは第14話の後半が欠けていることと関わり、第22話の話番号が一筆で書かれることは第21話の欠と関わるというように、前話に問題があった場合がある。第29話の話番号重複の現象も追記が一括して行われていればあり得ないことで

ある。目録段階で整備されていた話番号を標題に追記する場合、標題にすでに話番号が書かれている場合はそのままにして、書かれていない場合のみ追記が行われていったという事であろう。なお、現存する鈴鹿本巻二では第一・第二まで話番号があって、第三に相当する空白があり、後は「第」のみで番号がない。巻十では第三話と第四話の間に「第」のみで話番号のない説話が挟まる。そして第五話から「第」のみで話番号のない説話が第七の前まで三話続き第廿九・三十相当話は目録と違う説話で話番号を欠く。この巻十の目録と本文標題の齟齬については宮田尚氏『今昔物語集震旦部考』に編集の問題として論じられている。